



類聚發句集冬部

十月

蝶夢編

更衣

のせけや表着るる更衣之

一井

小春

まき重ハ袖とぬけり衣うえ  
時雨傘のあやう一日小春は

李下  
踏通

てしく昨日の初雪を小春は

柳妖

昼中より一時さくら小春は

理然

小六月

峰山は鏡子出き祭小六月

山居

夕陽の流るる小六月

雲黄

神送

夜去らば一云ぬくのかやと  
馬の敷居を中居や神送  
以上不意よ木立集や神送  
目よ又ぬ連ふゆや神送  
あまのぬ雲の去りや神送  
留白のるん荒らぬ神の居  
神垣の留るたのりや源太丈  
赤留るとそ戸も去りぬ  
弘大や孫も直さぬ神の留  
洲築も木の葉も神の居

尾張 一露  
正壽  
露川  
司鐘  
隆巳  
芭蕉  
凉菖  
壺平  
若菜  
冬一

神の留

亥の子

あまのくつと海抜をたか子に  
重箱より敷たぐりた亥子に  
お秋とは伏虎より不亥子に  
達磨忌や梅の腕も一と  
たのゆ馬や柳子よさる懼外  
達磨忌や梨柿も虎のまを  
寺二ノ高や神の悟も  
半のゆとちや神の悟も  
芭蕉忌や神の悟も  
まのくつと海抜をたか子に

尾張 徐寅  
清水  
彦元  
曾良  
乙由  
碧海  
許紅  
伊勢 棠故  
史邦  
史考

達磨忌

芭蕉忌

師教講

此教講や池のちり外  
杜も掃も池水りりり  
莫弱り為老付り  
上人老教り為老付  
六教講や池のちり  
池のちり月夜り  
極楽のちり月夜り  
神のちり皮袋り  
勢のちり立付り  
社又縁のちり

芭蕉  
治圃  
許六  
史邦  
巴静  
壽仙  
浪化  
許六  
乙由

十夜

鯉子講

元ひは海醜黄は務  
振黄の房あしり  
志船板は小別ちり  
鯉子講大志願も  
精進の布袋も  
柳少葉小神も  
水清りり清りり  
聖志も老の身も  
神もくわうの  
一月の海も掃も

芭蕉  
其角  
比嘉  
巴雀  
誇水  
子那  
花字  
巴雀  
條後

誓文掃  
神速

神速

燭用

燭用や左友死ゆく燭の象  
燭用より庭焚くを数子たし  
がひまに遠出給へたりと  
ふれまや慢くつふりて灰の石  
燭用やまゝ加わある電灰  
口切り燭用をそふりて  
口ぬや今更けり一狐も  
口おりや禱のまゝに線花葡  
口切あ日月の影のまゝに  
まゝとらふもまゝに川時雨

初時雨

色蕉 万平 群六 車遠 夜綿 芭蕉 木守 其角 紀末 芭蕉

初より様も小義とほげく  
考子母もあつくりぬ神々  
新葉の巻根の末や川時雨  
けりあは垣の弦目も初より  
朝日や三粒降くも初時雨  
神々几節かま骨のあまあり  
新巻の石もあま川初時雨  
道坂より遠くはる川時雨  
その末のあはる賞ん川時雨  
新巻の巻人より神々

去来 群六 群六 休斗 西冷 酒巻 汎休 乙由 宇中

時雨

相の安れ吹れく神々れ  
夕暮霞もくしてうらみ  
雲ももはるら雲影も  
一時雨もめくけり  
去る野也田の荒株の思  
くはるるは雲もめくけり  
午羽り入り候てくれば  
一一く我まらけり日如  
去るのやむら我んも荒  
一方冬最のよつくも雲

希因 柳儿 去来 芭蕉 如及 本山 露沾 冬角 文字

馬より仲の時雨  
馬もめくけり  
あみ出り  
さ夜をく  
此の雲も  
まのうら  
麦葉の  
若れも  
時雨  
楚持の

杜園 鶯水 岩葉 北枝 乙妙 李由 以翁 子那 正秀

川音時雨  
松風時雨  
志まら  
初霜

朝日ふりくちくまは時雨  
芋焼り男あやむ時雨  
鎌が川持くまかきく吹丸  
松の葉おき方切く時雨  
尾うらうく鎌の時雨  
川音あきらめ月あきぬ  
時雨ぬく体く松風のたぐ  
あきらめあき雲のま  
色くす傘か直毛志まら  
も川音あきらめ時雨

泥足  
風國  
希因  
尾筑  
北達  
水枝  
文家  
團指  
文考

霜

も川音あきらめ時雨  
初霜あきらめ時雨  
初霜あきらめ時雨  
馬鹿鬼はの時雨  
一葉あきらめ時雨  
かき風あきらめ時雨  
外あきらめ時雨  
何れあきらめ時雨  
初霜あきらめ時雨

千川  
北枝  
北坡  
色蕉  
夕水  
文考  
一村  
一葉  
の足

霜柱

雲夜

初雪

蒼志とや壺あらしの露草をひ  
 きくし吹あられ霞を色も相  
 和らぐと紅色さうやと云  
 霧中をばはまきくやも  
 一色もさあわらぬ夜は  
 初雪や、懐き事くく雲は  
 雲の夜や大の字はく様の下  
 と川を流るる水も流るる  
 初雪や、おのれもたまたま  
 はつらとや雲さうさう橋の上

近江 福津  
 野寺  
 圃仙  
 林竹  
 飛水  
 伊豫 向空  
 駿牧  
 木周  
 芭蕉  
 冬六

初雪あらし壺あらしの露草をひ  
 きくし吹あられ霞を色も相  
 和らぐと紅色さうやと云  
 霧中をばはまきくやも  
 一色もさあわらぬ夜は  
 初雪や、懐き事くく雲は  
 雲の夜や大の字はく様の下  
 と川を流るる水も流るる  
 初雪や、おのれもたまたま  
 はつらとや雲さうさう橋の上

尾籠  
 山川  
 尾春  
 飛坡  
 路通  
 文考



千那 初雪 許六 斜炭 利半 種与 治乙 まん  
 千那 初雪 許六 斜炭 利半 種与 治乙 まん  
 千那 初雪 許六 斜炭 利半 種与 治乙 まん  
 千那 初雪 許六 斜炭 利半 種与 治乙 まん

初水 持入 初水 宗瑞 巴禱 鳥明 初水 持入  
 初水 持入 初水 宗瑞 巴禱 鳥明 初水 持入  
 初水 持入 初水 宗瑞 巴禱 鳥明 初水 持入  
 初水 持入 初水 宗瑞 巴禱 鳥明 初水 持入

初水 持入

冬の月

け木戸を鏡のまじけ冬の月  
相の木を赤くくくく冬おろ  
雪の万の月をそさゆれ枝の雪  
まじ月や夜合をふら夜園の  
は光くくまの月まじく通る冬を  
志むく水をくく月月の光が  
夜まの家の外をくく冬の月  
有るの雲より山よりまじく  
あまの夜をくく月をくく冬おろ  
まじ月や山をの橋をくく我ひら

甚角 赤紫 若弓 秋風 去芳 母斛 瓦黄 袴光 饒斐

寒

俗よりを扱より波か名をまじ  
地前の歯くく月をくく笑の棚  
松葉を焚くく手拭あつたを  
雪あつたは位一かか名をくく  
月明下ゆり向うくく月をくく  
まじくく水氷たるくくをくく  
けをくく後もまじくく夜あつる  
まじりけをくく夜をくく  
大盤より刺刀のあつたをくく  
葉大根の古くをくく

深莞 芭蕉 朔春 太末 刺牛 文考 許六 乙抄

人あや夜せば此の夜も  
 身も知きて机よりかきさか  
 仗者一人も境へ通敷を  
 彼あふき程の音もさ  
 物事の急り程もさ  
 鴨川者一徹まはしは  
 ついでして春もさ  
 意地程も二階の  
 猶及食干かひひも  
 雪もまどかか  
 種坡  
 舎野  
 之角  
 木等  
 風國  
 故是  
 採志  
 山石  
 曾良  
 冬九

落葉

苦夏約孔梳の  
 山もさ  
 かつ鐘の戸り吹  
 起る中  
 雲の  
 猶也  
 百の  
 掃あ  
 力  
 狼  
 角上  
 点吹  
 千仙  
 兔士  
 哥川  
 曉卷  
 芭蕉  
 如行  
 巴風  
 程已

木葉

葉の落ちゆくをみるに  
揺り落ちゆく葉は  
川に流るる葉は  
我土の葉は  
枯らぬ葉は  
云へくは  
葉の落ちゆくを  
一物も落ちぬ葉は  
云へくは  
木の葉は  
守武

玄梅

牧亭

左靜

巴靜

木兒

後川

馬次

文百

守武

冬十

枯葉  
木枯風

三尺の山も何れも  
大いなる木の葉は  
葉の落ちゆくを  
水に流るる葉は  
木の葉は  
木の葉は  
木の葉は  
木の葉は  
木の葉は  
木の葉は  
木の葉は

芭蕉

秋風

木兒

文百

守武

左靜

巴靜

木兒

文百

守武

あつりや川田の秋夜鉄筆水  
木かぶりや二月の月の吹ち乾り  
風や仲をとりさるる山老切  
こがりやをさるるを散るる  
木かぶりや村遠へ音もやれ  
木枯やつたなく啼り猿か  
おぼろ木枯の柿老の影か  
あつり木枯より老の春も  
木枯老二の影もや幾つ  
あつりや鼻杖出川か

惟然  
若手  
之角  
智月  
子珊  
北元  
岩堂  
子英  
昌房  
文考

冬十一

冬木立

あつりや木立をくぬき  
木かぶりや葉も落ちる  
風や或夜ひそかに  
あつりやけしき  
木枯や日も  
こがりや  
木かぶり  
風や  
あつり  
冬木立

林石  
若生  
栗伍  
其汀  
標良  
標菱  
標丸  
伊賀  
其角



枯蕨  
枯萩  
枯草花  
枯蓮  
枯菊  
枯葛

蕨かたて葉の細き何れへ  
萩はくたき花を枝を架  
枯草花 葉は細く花は白  
蓮は花がくちひさし花を  
色くは葉一つは枯り花  
鶴の子より白くは葉の葉  
葉の葉枝は多くは花は  
あふ菊のかたき花を枝を  
根は風情も菊のうれさ

惟然  
新約  
秋風  
一髪  
翠象  
秋水  
其南  
花重  
花黄  
今我

卷十三

枯葛  
枯草  
枯野

葛はくたき葉はくちひさし  
花はくたき花はくちひさし  
草はくたき花はくちひさし  
蓮はくたき花はくちひさし  
菊はくたき花はくちひさし  
葛はくたき花はくちひさし  
萩はくたき花はくちひさし  
草はくたき花はくちひさし  
蓮はくたき花はくちひさし  
菊はくたき花はくちひさし  
葛はくたき花はくちひさし  
萩はくたき花はくちひさし  
草はくたき花はくちひさし  
蓮はくたき花はくちひさし  
菊はくたき花はくちひさし

為有  
秋風  
如牛  
去芳  
支考  
智月  
其南  
曲翠  
許六  
牧亭

くらくと梅子花もふ枯れぬ  
 苦菜種く長く暮れぬ心  
 ひと出さく物君の心枯れぬ  
 咲きし枯れぬ人老ぬうれ  
 嘆息もあらずぬれぬ  
 枯れぬ月も物も小松も  
 とらへ草枯れぬあらず  
 吹きし物も大なりかし  
 念佛のほろりと出さぬ  
 よとく水日のりともぬ

尚ふ  
 末山  
 雲行  
 吾仲  
 約壺  
 蓮之  
 宗瑞  
 十磨  
 麦水

冬十四

枇杷の花

月さつらとあらしぬれ枯れぬ  
 夕の泣き声く梅もうれ  
 月も咲くつ散やらん  
 ひとの心持もあらずぬ  
 冬の日も寒よりぬれぬ  
 山も花もあらずぬ  
 山茶花もあらずぬ  
 山茶花もあらずぬ  
 何れ木もあらずぬ

雨竹  
 汀雨  
 尚ふ  
 涼亮  
 怪翁  
 曲琴  
 白袋  
 栄友  
 侍太  
 末山

茶の花

梅の花



中々河とさうふ 梅の乳  
 梅の花さくや山子の毛氣あひ  
 忘風をにほくや梢をえくふ  
 了柳冬待り子孫のり梅の花  
 かくて花日のあふえを恨めり  
 春をさる秋のあふや梅の花  
 春梅ののちへ性好むる梨系  
 春の夜のあふえくは梅の花  
 梅まると咲く見せり梅の花  
 春のあふを散るは梅のえくふ

尚水 怒風 露川 曲翠 乙由 島洗 松書 千代 連枝 度旌

冬十二

八つ子花

冬牡丹

水仙

春の梅く八つ子あふよ梅の乳  
 雷を横のうらさや花八子  
 梅のつや梅のりや冬牡丹  
 春のあふは梅のりや冬牡丹  
 春のあふは梅のりや冬牡丹  
 春のあふは梅のりや冬牡丹  
 水仙の中うらや水徳花  
 水仙のあふは梅のりや冬牡丹  
 水仙のあふは梅のりや冬牡丹

尚水 百里 昭葉 千代 貴古 芭蕉 高川 一品 斜炭 鳥久

綿木

葉の花

寒菊

その他三子入丸末の後  
古くもんやふく冬よもれ  
水仙もあまはれをいふ  
みけりやあはれ葉のつらみ  
綿木や傍り子葉の葉より  
葉のそれをいふとあま白れ  
葉の花や摘み入丸末より  
葉のむや葉よりせり成勢を  
葉れをいふとあまはれ  
葉も葉や粉稜のうたひのそ

風草  
子代  
朱桂  
貞之  
心秀  
出羽 仙臺  
吳天  
己筑  
芭蕉  
冬十六

つばき

室後

寒葉のそつと静か細うれ  
寒菊の傍もあまやせ大根  
うん葉や一枝よ見せふ葉  
葉はちやその葉をいふと  
かん葉や色く葉の枯れ後  
うん葉や葉をいふと葉  
河骨のそつと葉をいふと  
葉の下に葉をいふと葉  
葉のむや葉よりせり成勢を  
葉れをいふとあまはれ  
葉も葉や粉稜のうたひのそ

射江  
許六  
寧院  
長英  
蜂友  
柳儿  
みり  
屋元  
葉人  
室後

大根引

大豆と並く喰や梅の乳  
常にも梅と申く常く色の中  
難呼り小切を常く大根引  
出女より投く通るや大根引  
白羽の鳥の道へ一抱大根引  
水鏡の鳥の道へ一抱大根引  
下りももくく飛ぶ大根引  
念佛より力の入るや大根引  
引切くおしと教て大根引  
このおしと常く大根引

冬十七  
子代 秋瓜 西川 老士 備参 知是 許六 芭蕉 班象 志理

千葉つ

苧菜

蕎麦刈

麦耐

細代寺

木よりの尾身より約千葉  
一夜くとおしと常く大根引  
君んとおしと常く大根引  
刈切やおしと常く大根引  
蕎麦刈やおしと常く大根引  
麦耐より孤の元大根引  
麦耐より一疇の元大根引  
麦耐より一疇の元大根引  
静くとおしと常く大根引  
意の寺よりおしと常く大根引

後庄 柳丸 苧菜 麦耐 芭蕉 乙由 任 隆号 文章 支考

氷急

あつて身死まにあらまはる大赤  
大の敷や入るく清を網代り  
何れりりり清の解と解はり  
孫元子月を絶せしあつて身  
夜の雨仕合ふうの何れを  
あつて身死まにあらまはる  
雲は夜多女変死はり網代守  
兼笠さくしは後子老るあつて  
氷とれ水重と化を絶つあつて  
月うけ老くくけてるも氷急

友元  
言水  
許六  
牧老  
兼石  
木兒  
文石  
園更  
宗鑑  
松笠

染漬

たつへ  
千尋

あつて身死まにあらまはる大赤  
染漬や流るるあつて身死まに  
敷あつて身死まにあらまはる  
あつて身死まにあらまはる  
よれりりり清の解と解はり  
あつて身死まにあらまはる  
夕ちゆら大赤船の唄あつて  
引ゆや子鳥うへはる母の泣  
あつて身死まにあらまはる  
背戸口の入るるあつて身死まに

如堂  
卯七  
去来  
之南  
曾良  
知及  
儲雅  
山夕  
文守

鳴 龜

水乳品よはれん千鳥の夜は  
 立ちあがり浮桶ひのちのり  
 夜あがりも千鳥もあはれ  
 一羽つゝ消りてさへも  
 毛衣下はみくぬく  
 鈴亀のあやうき  
 ぬいぢえんくも  
 鴨の巻く  
 赤入く

乙兒 李更 己峯 能多 麦毘 芭蕉 凡雪 冬子 朱拙 北枝

つれづれと雪ふりて  
 出づるは常し  
 鳴るは  
 立浪り  
 つれづれと  
 吹き  
 皆舟  
 大浪り  
 一人  
 冬拈

今那 冬子 山隈 雨亭 巴辭 乙由 希因 貴古

何事やら  
驚き

外橋や秋明の巻の度敷青  
あまの巻や八白の水乃もも  
後のつ川入るる巻を他の巻  
折るや巻成る巻成る巻成る  
驚き巻成る巻成る巻成る  
押巻や水の巻成る巻成る  
折馬や波濤の巻成る巻成る  
巻成る巻成る巻成る巻成る  
水の巻成る巻成る巻成る巻成る

描 那上  
馬吹  
野水  
柳若  
馬光  
休遊  
素丸  
巻成  
李由  
瓢界  
冬二十

水鳥

木兔

水鳥や巻成る巻成る巻成る  
水鳥らの浪の巻成る巻成る  
水鳥や月成る巻成る巻成る  
巻成る巻成る巻成る巻成る  
水鳥や巻成る巻成る巻成る  
目成る巻成る巻成る巻成る  
木兔の巻成る巻成る巻成る  
水鳥や巻成る巻成る巻成る  
木兔や巻成る巻成る巻成る

巻成  
乙女  
休遊  
蕉雨  
春路  
茶境  
那明  
月野  
那枝  
素丸

竹鶴

雪より啼き見せり又花の  
晩方若花や輝き又花の  
つゝ葉は嵐と吹く竹鶴  
影に花より不花や花の  
のほろろ風うらまゝ一鶴鶴  
夜は自らも象へたや竹鶴  
朝起る花火や花や又花の  
とひつゝ花を我かくや竹鶴  
冷ふ事あるよとほろ大焚火  
ちとなく雪は子よ何くしん

大焚火  
雪は啼

許六  
竹鶴  
凹山  
風國  
信若  
眺臺  
鹿元  
芳維  
涼菟  
仙雲  
冬廿一

夜興引

きききや琴弾きか敷き真  
得たは夜興の大かよひ  
秋興引や花より花の  
夜興引花のあつた月  
尾張の月より花の  
生かすは花より花の  
さつと花月よ花の  
おぼろり花のまら花の  
おぼろり花のまら花の  
花のまら花のまら花の  
花のまら花のまら花の

中流流

桂川  
氷花  
春波  
風付  
去来  
色燕  
車馬  
如行  
大次

河豚 鱧

生海産此夜の如くや言ふ如く  
及び下りまゝの八層より海産は  
市へ出くはる月のまゝの如く二八  
入るおのちまゝをておるは海産  
鱧舟や比良もろくも雪もろくも  
おの事て果てはひもせん鱧の扱  
ゆくとくや網もまのよき分り別  
河豚汁ははるかまの如くは  
ゆへ汁やわくは家もはれくは  
鱧煮の詰合くひり命一那

高川 利害 春波 山李 李由 鯉魚 芭蕉 魚角 永吟

納豆汁

芹焼

飯汁や吟友たはけりふた夢  
漁人よりおひともせん飯の海  
ゆくとくも一藤入りく種を  
ひらりふは末あまはゆくと汁  
みふ近く端く二人や河豚汁  
河豚汁お水もろくも海産は  
ゆへる古はまゝをたは豆は  
納豆やたろ海産はり蓮の糸  
駄立のふはりゆへるおとくは  
芹焼や海産はる田井の初水

一洞 去来 兔士 傑者 麦士 布舟 老平 浮死 笈推 芭蕉



楯

楯の火や焼くは名已六尺  
湯この火や暖は啼たう  
楯は火子瓢名色もかりり  
湯この火より親子是より  
炭竈と名は焼く是は少  
炭の油や書火より立より  
すゝ竈や麻の火く者より  
炭の油や日火急焼と扱者上  
炭焼や焼者湯水泉と  
炭焼も湯も火の火焼く

文章 高川 捺志 去来 不炊 在葉 巴人 瓦付 左角 渭控

冬北三

炭竈

炭焼

炭

炭や焼ぬむの宮農技  
花は焼け行あるれく炭儀  
焼くたはては名や炭者  
炭竈といふは焼く者  
うと炭もその木葉より  
山の中かひの山をわく  
炭の地定れおるは名  
炭よりや已く焚くは炭  
何事と名入るは名  
かろ名くは名も名

忠知 任は 陽和 醍非 其角 南林 可全 晉江 小春 飛水

衾

炭費

紙子

初雪の二丈よ志川志合く礼  
息女礼新なりき深紙ゆふ  
猶の事てきりしにの紙合の那  
ちり舞やたむもかろ支紙合  
のいも在よか引し紙子礼  
定紙よ食さくゆる留子礼  
南をりさつるき紙紙子礼  
た免針く雪見よ中紙子礼  
糸岡紙襟了紙くかこ礼  
初風了あそ川色く紙子礼

枕妖  
急素  
紙合  
餅麦  
立吟  
木導  
色蕉  
高川  
涼菟

冬北四

蒲葦

可し紙の仔連仕あして紙子礼  
息災とむ免ある紙子礼  
下に紙くもき紙のくも紙子礼  
毛ゆらんや怖い後入る後夜の侍  
疫のや大提紙のき紙中  
草足袋のむしあ紙子礼  
髪了きくきやつりて紙帽子  
初雪紙信きまき紙中礼  
用のあ紙身あ紙く紙巾礼  
彈きく紙紙く紙巾あ紙

その  
素丸  
玄武  
涼菟  
き角  
一袋  
素因  
毛紙  
玄芳  
木導

足袋

紙帽子

紙巾

湯婆

埋火

色く此改中のもてや丸歌中  
朝夕中夜中見れば改中  
ちうつま又何少交重たつまん  
浄奇うう忌まきく喉て頭巾  
湯婆うう歌の世うれまの  
踏れもかきかき湯婆  
うう火や燈のあかき歌法  
埋火や茶園と通ま茶の白  
うう火や吹耳のうう風  
埋火より去るまきうう白

松花 素丸 也有 一幹 凉莞 佳木 芭蕉 許六 百里 神叔

冬廿五

火鉢

火桶

埋火や雪の巻哉うままり  
うう火や神のうううまの業  
ううまのあまのうう火鉢  
今ひのうう火鉢のうう  
あまのうう火鉢のうう  
脈尺のうう火鉢のうう  
おまのうう火鉢のうう  
火桶抱く頤脚をかき  
瓢箪の上うけ抱く火桶  
の書中昇るうう火桶

宗陽 巴人 風後 頃水 秋色 吏明 他志 臨運 陽和 呼下

大燧

ほしくと燃りさし古き大燧は  
何つと及松のたろや巨燧  
つりとぬく交ぜさし海の大燧は  
物かよわし八高文巨燧は  
白松の交ぜさしうねり大燧は  
床より少くと文不火燧は  
足つれ火若部不巨燧は  
物かたたささあつた大燧は  
洋の如き中にひく大燧は  
物かよわしつりつり大燧は

文字  
芭蕉  
字安  
猿轡  
魚目  
詭勢  
野棠  
落梧  
春波  
左辭

冬廿六

冬籠

極楽へ足さし一のき巨燧は  
姑老おとゆめく起さし  
佛もなぬ事して大燧は  
金屏老松の古ひや冬あり  
冬籠はさし海にけし  
おくりつりつりつり大燧  
人哉吐く息を想ん冬あり  
吾老も雲ありつりつり  
汁溜の流起つりつり  
はしくと燧の免やあつり

玉葉  
守捨  
陸史  
芭蕉  
千那  
涼菫  
冬角

櫻たぐ交むりし信子や冬籠  
 冬ありり移巻の物ひの意うれ  
 狭路も我もさひしり冬ありり  
 冬あり架靴の筒の埃の那  
 物ありり夜更木のあどい  
 焼もろこころく丸く冬ありり  
 冬籠篋のりく本の篋に  
 下帯ありりよけつくゆゆ籠  
 夜更篋につりり夜更籠冬籠  
 夏よきへ字のいさきや冬籠

去芳 高川 正秀 木守 松風 那坡 彫棠 木節 呂物 温故

冬七七

冬楯  
 硯箱より檜楯の皮や冬ありり  
 石瓦出や巻よきり此冬籠  
 蔭の棠その根植むけ冬籠へ  
 一村ありりあひむけ冬楯  
 山より冬籠さく水へ冬籠  
 味よき換楯も出りあひ冬  
 冬籠へつひ棠のりたまたは  
 伊勢 淡色 那水 和及 汎津 那坡 其角 信徳 篠爰

山籠  
 雪垣

伊勢 淡色 那水 和及 汎津 那坡 其角 信徳 篠爰

雪等

つくりのちねはくしき老等  
棹立く哉のほきやいづく

涼菫  
正秀

十一月

冬至

己の昼秋乃夜志乾終を山  
雪の老いりり向ふ冬玉の乳

乙州

曆費

月し老いりりもちり曆より  
曆よりを食は彼者河よりり

伊豆  
朱批  
如髪

芝菰歌

顔尺也や暖いさむ下邸の櫓  
白尺せも四半さく多皮をい

其角  
汎牛

冬九八

笠置

笠置や子細りく拉不親心  
髪也や枕の世話の又あはれ

志雲  
松因

津火焼

津火焼の多物み乳村の以  
浪山り吹草余のそく家

智月

子祭

福多けりや我を歌ふる氣も  
朝風や焼く妻の吹れり

李由  
雲麻

子焼心

夜神系や鼻息を面終完  
津神樂や火を焚儀まあやん

之角

里神系

秋神系や柀ぬひら歌節の裏  
朝川り木松子も尺は里神系

曾良

空也忌  
津敵

大御魂  
御佛事

一 誰と誰か知らんや里非来  
空也忌や重た方より疎か  
その古事 彌生元七と誦たを  
今より重た方より疎か  
今より重た方より疎か  
約豆切ら重た方より疎か  
孫多勝とは方此とあらや津敵  
とてさふく川破をともむら  
鏡は此の物と方くと大御魂  
古佛事や是も他力の御豆汁

其角  
表字  
去来  
先立  
その角  
色徳  
松法  
饅道  
免士  
向空  
寺子

卷北九

雪

古事や牛造人の誦よ出ら  
空也忌や重た方より疎か  
市入りいそはさうん雪の笠  
る我々誦ふ重た方より疎か  
愁くといふたぐや雪の門  
ふ所の何れも方や雪の笠  
人我と方より疎か  
空也忌や重た方より疎か  
の古事や重た方より疎か  
と空也忌や重た方より疎か

出  
一方  
表字  
去来  
先立  
その角  
寺子

驚きぬ雪の降るを一夜の雪  
那も心も雪にまじりて何は  
長くも川にまじりて雪の  
名おやうあけそえおの  
月ひれふすふたより雪の  
雪の松杉はもれを枝を  
傘をさすも雪の大き  
き雪を我はあけの大き  
大雪や隣のちかふゆきを  
さすまに雪の風鈴のまじり

支考  
支考  
一品  
波村  
北枝  
若角  
浪化  
今我

冬三十一

降りあがり雪のまじりて  
夜の雪にまじりて何は  
長くも川にまじりて雪の  
名おやうあけそえおの  
月ひれふすふたより雪の  
雪の松杉はもれを枝を  
傘をさすも雪の大き  
き雪を我はあけの大き  
大雪や隣のちかふゆきを  
さすまに雪の風鈴のまじり

治徳  
筆毛  
四睡  
吾伴  
孤衾  
こ光  
蘆花  
此節  
去芳



雪原  
雪栲

はつりりと破れぬ雪原の雪  
薄の雪のつらさあふちの後に  
清く雪あふれぬ雪のけ雪の舟  
雪の舟あふれぬ雪の舟  
雪の舟あふれぬ雪の舟  
雪の舟あふれぬ雪の舟  
雪の舟あふれぬ雪の舟  
雪の舟あふれぬ雪の舟  
雪の舟あふれぬ雪の舟  
雪の舟あふれぬ雪の舟

雪舟  
乞食  
杜若  
貴古  
孫子  
芭蕉  
涼菴  
舟子  
現家  
雪路  
卷一

雪佛

雪兔  
吹雪

見よ雪の大きくなりぬ雪舟  
佛の雪の大きくなりぬ雪舟  
佛の雪の大きくなりぬ雪舟  
佛の雪の大きくなりぬ雪舟  
佛の雪の大きくなりぬ雪舟  
佛の雪の大きくなりぬ雪舟  
佛の雪の大きくなりぬ雪舟  
佛の雪の大きくなりぬ雪舟  
佛の雪の大きくなりぬ雪舟  
佛の雪の大きくなりぬ雪舟

布舟  
一井  
舟子  
折風  
乙妙  
李由  
秋之坊  
史邦  
意流  
任之

みそれ

一吹雪やりさしき架るのけ  
松林やまふしうる敷みそれ  
佛さの庭あけて寝るそれ  
川哉の禪を志はふそれ  
子の危哉引さあそれ  
いふれまきあそれの松木笠  
はらまき月取を敷くれ  
寝る尾のとつそれ  
柿の葉さうしあそれ  
はくぬ敷やや小浪かき

歌水  
去来  
文章  
毛施  
疎友  
芭蕉  
杜國  
耕雲  
卯七  
之角

霰

氷柱

靉々たる氷柱けん玉河に  
白丁者根すいまく敷あそれ  
夜あしに申てかき敷の那  
冬もとや雨しちる何れ  
石菰の葉もあめあそれ  
飛入ふ糸のあつれや窓の中  
さちあそ何それ氷柱か  
井のりさの草葉もあつら  
露未りさうそれ氷柱か  
湯とふつさして居るはら

光雪  
与考  
雲川  
木岡  
荑花  
世報  
夜亦  
花黄  
麻父  
胡因

氷凍

氷凍つて月影さめつらば  
凍つても凍つまなう無凡  
田舎水の有け氷乾然くれ  
そりくも氷のらさ小舟の舟  
程破る夜の氷中杯さるれ  
あつ木のお敷まやも氷が  
さうつ免く我と碎ふ氷くれ  
魚の乾物めやも氷あま氷くれ  
枯草茂るかや下して氷くれ  
あけくも氷のいもく氷くれ

氷凍 秋坊 凡兆 清門 芭蕉 不南 正秀 柳丸 小枝 林崎

冬世三

冬世栞

権の花  
太山松  
葱

く氷氷打目のまが葉ゆが  
あはれ舟の投ふ氷の那  
ひきけは籠をり投敷ぬれ  
荒行者名詠也 文水の舟  
舟のうの重き我事く氷氷  
雪ら小舟の南より冬至栞  
靡ゆりたうたんへく冬至栞  
月より舟や権の花ちふ云はれ  
世は色よのぬ太山松くれ  
ひより舟はく雪裏切の白くれ

権の花 太山松 葱  
秋水 乙州 冬世 四國 坂雲 帆舟  
藪舟 超波 箕蓋 麦由 秋水 乙州 冬世

人參引  
生姜塩  
雲海苔

味ふも数子張も葱の白く乳  
葱は多しや傾城町の夕河  
胡蝶書衣書や引らん多し人參  
孔子少くその書へあつて是なり  
海苔の巻や書くもつらん書と  
黒海苔や我衣もよま書汁  
乳ましく標かきらん鷹の敷  
取ましくおらた鷹の敷衣乳  
たう鼓目の林那よまはは乳那  
いさゝ川鷹引は山家ありは

存者  
味麦  
其用  
其用  
文字  
文字  
子英  
大平  
中圃  
冬世四

鷹

鷹狩

鷹狩用りまは山家のつらり  
物衣衣神遊と乳まは書衣の鷹  
たうからや侍殿書衣書衣  
麦之書衣洞と書衣鷹狩乳  
鷹狩りや初書も乳まは書衣  
いさゝ川鷹引は山家ありは  
太儀おやのり好まは書衣  
暖め麦乳、敷や暖と標  
林と書衣や鷹の力ま

系乳  
文考  
知七  
他書  
麦水  
後書  
及書  
文曉  
南水

暖考

力車

菓子

練実

初餅

乾鮭

いさ

練つく男とてはなほちう

七海カク入る馬もく練とら

七海カク入る馬もく練とら

初餅やはほのこるる大い山

かきけや死する耐老のあま

干飯や割木と抄餅のあま

うさけや二平のあま

かきけや山あまのあま

干飯や既下枯木と花あま

八条我事一口のいさ

万平

忍戸

忍戸

雪芝

近之

万平

等龜

光枝

日良

冬川

牡蠣

杜夫葱

薬食

とら食子あつたる練実

餅あまや我あまのあま

既下枯木と花あま

かきけや山あまのあま

干飯や既下枯木と花あま

八条我事一口のいさ

あまのあま

餅あまのあま

薬食のあま

獲鼓のあま

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

玉子酒  
 生薑酒  
 薔薇酒  
 あらび  
 手あけ  
 水鼻

美らひ筈とらひの女うれ  
 ちや甘海をわあやあや一葉春  
 於春をさへ入り喰ちんをさ  
 少少とさる者さう一筋卯辰  
 言もあ中遊春他あや生薑酒  
 御焚く夜あ空何んそと酒  
 あらびや何れ遊春の旅を  
 何れさや雪踏よさる對面  
 梅枝おちるああやけもさる地  
 湯や押さあさる措の上

丹後 舟圍  
 也有  
 琵琶  
 松笠  
 舞後  
 幻叶  
 氷花  
 碧草  
 山川  
 櫻雲

冬吐六

雪夜  
 換  
 雪車  
 乙子節日  
 正月事始  
 臘八

十二月

雪夜や日あはるけ於け  
 かやまの戻りあやさる日れ  
 何れさる言あさるあさる  
 言あさるや休むさるさる

雪夜  
 換  
 雪車

乙子節日  
 正月事始  
 臘八

長季のさるさる乙子の旅ひ  
 事始さるさる物さるさる  
 言もあさるさるさるさる  
 臘八や夜あ佛り何れも

春寄  
 東陌  
 梅子  
 龜洞

走馬  
 尚白  
 可磨  
 支考

仙名會

臘八や後をさうんせ約豆汁  
臘八や今朝熱炊中屋世乃味  
臘八や今夕海走八日のをさき  
臘八や八飯の薪も山哉出  
臘八やせ免く火燒の山と免  
臘八や粥煮中少も守の教  
臘八や傳へ守眼者妻れ心  
臘八や膏のゆり無迷ひ相  
御名の礼り授く心数ど  
仙名や菓好飲何事もあらぬ

許六  
性成  
枚風  
乙由  
墨芝  
六積  
大睡  
既心  
野水  
酒半

卷七

寒只

寒の月

寒垢齋

老らくのり少く事く出御名  
御名や罷りあはよ後の春  
月念のあり針立ん寒の入  
寒よ入ふよ種く夜忘の祝  
夜鐘も空也の渡も寒は内  
夜寒の解胃おつとまよ事男  
寒あり此追へくけや船あり  
寒垢齋の礼ありとく衣さき  
寒らさくの外少くたえ、端ひ  
寒垢齋り田舎のたの松守り

去来  
吾来  
色蕉  
阜袋  
芭蕉  
千川  
取具  
路通  
菓花  
免士

笑能

寒念佛

寒拈鉢や夏の涼み足也  
酒飯の飲酒多いうに寒念佛  
おれおれ証木の御堂念佛  
わうう身孤なる如し寒念佛  
おれおれ夜念のあまやかん念佛  
よきよき秋多き尼の寒念佛  
素心よ極楽あり寒念佛  
あまをくもかん涙涙の寒  
寒をとりつる松老鬼の如

安里  
其角  
文秀  
了耳  
菅峴  
文素  
存夏  
素丸  
風後  
李由

冬世八

寒聲

寒おや南大河老よお月  
旅人の寒おやや勢多の橋  
寒おや凡老老人老不  
寒聲や戻にせよ不常の寒  
寒い寒い暮れよ身て仕舞り  
寒敲や松子まのうらや  
寒おやさしく老おや又太師  
寒お代老音ひららや寒い道  
寒も老老の寒おやつら

之角  
柳妖  
幸依  
深河  
許六  
咲梨  
丸七  
史邦  
波弁

寒晒

寒道



寒の水  
重のお

汲るへく、いづくも水や重の水  
物に漬く、くを花さく、重のお

浮休  
重油

鶏文

白の陰は鶏ばらむ日南く乳

伊  
東末  
乳豊

鶴文

加すれや松の、いかに葉の、い

東末

園児

お見せせし、重の敷と園児が

九兆

札納

張るく、重は飾り、札納

巴辭

衣配

衣配り、重へ重敷、重く重

と

冬  
九

年貢

裁屑、重末の子、いかに底く、重

山  
峰

節分

節分、重我重、いかに重子、重

猿  
雛

年裁

重裁、重く、重の焼、重と

重  
軽舟

重舟

重舟、重舟、重舟、重舟、重舟

上  
秋毫

寄葉八景白鳥く〜寛永

兀梯

今川と子そ〜なり兀梯

西艦

梅鳩の牧歌〜なり兀梯

素冠

豆坊

豆と〜川舟中なる歌笑これ

之角

豆と〜りて歌も公忠の冠う〜ん

北坡

終夜

朝の終夜歌さ〜るに荒末か

況登

終夜と〜んや築地おん雨まて

猿爰

終夜か〜〜や朝の角大脚

也育

觸改次

月念の果や終り赤い〜

柳石

年丙嘉春

年丙嘉春と〜嘉春の日記は

李吟

冬四十

遠舟の去ま〜りて冬の日暮

許六

遠舟と〜〜りて冬の日暮

了ん

〜の日の暮お〜りて冬の日暮

冬士

冬木と〜〜りて冬の日暮

午代

年木樵

冬木と〜〜りて冬の日暮

空冠

冬木と〜〜りて冬の日暮

玉尾

煤拂

冬木と〜〜りて冬の日暮

芭蕉

冬木と〜〜りて冬の日暮

李由

冬木と〜〜りて冬の日暮

况登

冬木と〜〜りて冬の日暮

木導

何方よりくばらんき掃  
き掃や二階と下は古皮籠  
うづ紐も穿き掃きうづ紐掃  
煤掃く何やうたる古皮籠の内  
條拂ひ焼あうく掃きうづ紐  
き掃や何やうと掃きうづ紐  
掃く掃け盡きぬ者の掃きうづ紐  
大馬孔日南不あうやう掃  
煤掃や掃きうづ紐の月  
古掃や掃きうづ紐の月

春風  
雪意  
月下  
樹松  
久考  
尚念  
乙由  
可風  
風亭

冬

餅搗

有明と三十日もち餅の  
餅つまや大のえんち餅先  
りち餅きや火とくち餅部  
正月のち餅や餅の者お山  
餅つまや芥のきち餅部  
餅心や餅の目ち餅の  
りち餅の皮ち餅けて散  
子産の二のち餅や餅部  
餅つまや餅のきち餅部  
目ち餅の皮ち餅けて散

芭蕉  
許六  
伏水  
吾仲  
の風  
を角  
餅水  
玄来  
芭蕉  
一洞

餅花

春遊

節季

姨等

節孝のや白くし来くる海  
きれいり又平起へ交事には  
氣りむる女時と有く一節孝の  
節孝儀の梅子とぬ衣の巻  
節孝のくし乳の娘の子孫や  
節孝の梅の道にを遠へ  
世にけりり白く来とるぬり  
節孝のくし乳のくし乳  
姨等とく節孝のくし乳  
此は節孝のくし乳の娘等

免責  
伊賀 順珠  
東山  
枕後  
免士  
蓮之  
伊賀 田平  
武松 吉田  
宗 仙行  
冬四十二

身代

此の市原番賣子出とや乳  
おねのくし乳とくし乳の梅  
神崎もさつとや身代番賣者  
神あつとる心もさつとる身代  
喧嘩もさつとる身代  
海山の梅一節孝とくし乳  
節孝の梅子板賣の詞り乳  
足とて身代と節孝の端り乳

色蕉  
曾良  
玄来  
牧童  
立志  
魯江  
信徳  
宗電

結衣賣

種衣賣

山原の結衣賣とくし乳種衣賣

可風

紫林葉

素賣

白雲亭

古曆

年忘

冬の尾と踏ちあふれ分多林葉  
松賣や大系あふれ此詞つれ  
我尾多松賣又立く飛り  
古曆河より入るる氣くきん  
あしをふ未前の煙れぬ曆  
埃もといふく色り曆うれ  
此く忘れ羨垣あし七神り  
せつ以て冬忘は松枝短くれ  
冬日まの葉子松枝名氣去ん  
冬く忘れ筆より銷して物り

高川 素々  
周井 阿音  
此乃 丹赤  
色蕉 酒堂  
素丸

冬四十三

寒妻

早咲梅

臘妻

此く忘れ梅のこころまはるは松  
寒妻や雪が来くはくくと  
寒梅や色出さく妻はを  
かつらと病るる生而冬の梅  
後念の傍くく人冬老く先  
冬は出の事ごと梅の咲はり  
冬妻のあふれあふれ冬の色  
雪く乳方見るとや冬松梅  
一梅あけくやう物ゆの妻  
臘妻も咲くあつく冬色は

松丹 周之  
止法 梅然  
此通 露沾  
去芳 此通  
冬羽 松丹  
炭南 霜降  
治守 霜降

了嘆擧

際走

春と侍

火の神の歳日よあらぬ冬つて交  
るはかなくまよ嘆り冬は交  
るはかなくまよ嘆り冬は交  
ふはかなくまよ嘆り冬は交  
ふはかなくまよ嘆り冬は交  
ふはかなくまよ嘆り冬は交  
ふはかなくまよ嘆り冬は交  
ふはかなくまよ嘆り冬は交  
ふはかなくまよ嘆り冬は交  
ふはかなくまよ嘆り冬は交

一笑  
近  
飛来  
草木  
気堂  
芭蕉  
如行  
兔士  
浪化  
智月  
西風

冬四十四

表迎交

年々暮

春ちり起三多味唱の若然く外  
去ちりく楳嶺のひふ菜畑が  
乃のひふ菜畑へへんたのそく  
ふはかなくまよ嘆り冬は交  
ふはかなくまよ嘆り冬は交  
ふはかなくまよ嘆り冬は交  
ふはかなくまよ嘆り冬は交  
ふはかなくまよ嘆り冬は交  
ふはかなくまよ嘆り冬は交  
ふはかなくまよ嘆り冬は交  
ふはかなくまよ嘆り冬は交

李由  
竜洞  
希鉅  
其角  
芭蕉  
信徳  
踏通  
尚公  
木因

年のくれちいさは是は袋をかきく  
 瑞蓋のけくさと年のき  
 野こと今の数へは多たれ  
 出名もまこらへけ判  
 来多もくくきたらり  
 追名もく神らぬくのれ  
 同出またに涙あらむを歳のき  
 けくやあくあを伏るけ  
 け年や登り所の数えんか  
 け多も軟よ然く子子嫌く

月下  
 孤登  
 智月  
 松風  
 露川  
 文章  
 蓮之  
 湖春  
 毛角  
 牛山

冬四十二

行年

大世日

けくや空の鳥然のありれあ  
 枯年も冬のけや屋老取  
 多多けくさく八公きぬけ次才  
 けくけ越ちがくら帝の人  
 けくや多が造造の所詔人  
 けくもけ多を持ちをくの子  
 けくやお判して車  
 大三十日き免る世のきとめれ  
 冬の夜おり子是の十くり  
 大世もや伴泉も市也ぬ人

雲鼓  
 去来  
 汎水  
 風玉  
 許六  
 寒陀  
 希周  
 西鶴  
 去来  
 楚舟

冬

大さくや秋子懐中巻き  
大さくや子のさくはら人  
此中より翌元日を其  
瓜とて心や出や  
と巻木のつれがた

一万坪  
折取  
更登  
素巻  
利合

ふ



